

グレアム・グリーンの『燃え尽きた人間』における信仰の旅路の終焉

浜田 祐子

HAMADA, Yuko

1. はじめに

グレアム・グリーン (Graham Greene: 1904-91) は、かつて小説家ヘンリー・ジェイムズ (Henry James: 1843-1916) を論じたとき、「どのような作家にも結晶化のときがあり、そのような時期には主要なテーマが明確に表現され、鈍感な読者にも作家の内面世界が目に見えるものである。」(*Collected Essays*, 23下線は筆者による) と述べた。この「結晶化のとき」をグリーンに当て嵌めるならば、1938年の『ブライトン・ロック』(*Brighton Rock*)、1940年の『権力と栄光』(*The Power and the Glory*)、1951年の『情事の終わり』(*The End of the Affair*)、1961年の『燃え尽きた人間』(*A Burnt-Out Case* 以下、BOと略す) などの小説に該当するだろう。なかでも、『燃え尽きた人間』は、カトリック作家グリーンがさまざまな人生経験を経て人間への理解を深め、とりわけ完成度の高い作品となった。

『燃え尽きた人間』は、ヨーロッパの高名な教会建築家ケリー (Query) の物語である。舞台は、1959年頃のベルギー領コンゴにあるハンセン病施設である。彼は、仕事に対する野心も、恋の情熱も、信仰もすべて「燃え尽きた」と感じ、隠棲生活を送るためにコンゴのハンセン病施設へと辿り着く。この地で布教と医療活動に従事するのは院長を筆頭とするカトリック神父たちと修道女たち、また無神論者の医師コラン (Dr Colin) であった。人生のすべてにおいて「燃え尽きた」と感じ、苦しむケリーの自己診断によると、彼は心のハンセン病患者だった。「麻痺したハンセン病患者は苦しい、神経を感じるから。だがわたしは四肢が脱落した患者の一人だ。」(BO, 361) と言う。ところが、コラン博士の見立てでは、ケリーの症状は、まだ「燃え尽きた」といえる段階までには至っていない。「おそらく、きみの四肢の脱落は、それほど進行していないかもしれない。患者がここへ来るのが遅すぎたときには、病気が燃え尽つきる必要がある。」(BO, 361) と、博士は答えている。「全治するためには、身体各所が脱落するなどあらゆる症状が全て出て、患者が苦痛を感じる事がなくなる状態にまで達しなければならぬ」と言う。すなわち、「燃えつきて」苦しいと訴えるケリーの苦しみも、まだ十分な苦しみを経験していない。完全な治癒のためには、さらなる苦痛を覚悟しなければならぬというのが博士の診断である。

ちなみに、聖書で言及される癩病 (leprosy) と、ハンセン病とは同一ではない。聖書における癩病では、皮膚病による苦しみが神に対する罪意識と関わっている。たとえば、『岩波キリスト教辞典』

では以下のように説明される。「癩病は、鱗癬と斑紋を共通の特徴とする『重い皮膚病』の総称」であり、「祭儀的不浄の概念を伴う<罪人の病>という側面と、『受難のキリスト』の予表となる代苦贖罪的<メシアの病>という両義的宗教性を帯びている」(『岩波キリスト教辞典』、1170)。しかし、1874年、ノルウェーの医師ジェラルド・ハンセン (Gerhard Henrick Armauer Hansenn 1841-1912) が癩菌を発見して以降、この病についての宗教的な見方は取り除かれた。このときから、「癩病」(leprosy)にかわって「ハンセン病」(Hansen's disease)という名称が使われるようになる。ハンセンの発見以前には、ハンセン病以外の皮膚疾患も含まれていた可能性もある。そのため、「癩病」と「ハンセン病」とは必ずしも同義ではない。また、世界各地で患者に対して人権抑圧的隔離政策をとってきたことへの反省から、現在では差別的な用語「癩病」(leprosy)は、「ハンセン病」(Hansen's disease)へ、また「癩療養所」(leprosarium)は、一般的な「サナトリウム」(sanatorium)へと名称が改められている。そこで、本稿では、原作からの引用ではオリジナルを尊重するが、訳語としては基本的に「ハンセン病」「ハンセン病施設」を使用する。

グリーンのカトリック小説についての先行研究では、カトリック教徒の主人公たちがどのようにして神の秩序の住人として生き始めたのか、その転換点を中心に論じるものが多かった。『燃え尽きた人間』についても、主人公の生き方の転換点に焦点を合わせて論じたものは多い。たとえば、リチャード・ケリー (Richard Kelly) によると、主人公のケリーは「霊的存在へと進化的に収斂してゆく流れに強く抵抗する人物として描かれている。」(Kelly, 78) けれども、「マリイへの憐みや傷ついた無垢とかが最終的にケリーを死へと導くのである。」(Kelly, 75) と、他者であるマリイの苦しみに対する憐みが転換点となったと説明する。また、デイビッド・プライス＝ジョーンズ (David Pryce-Jones) も、人間の苦しみの価値への気づきをケリーの転換点とみる。『「きみはただもう少し辛抱しさえすればいい。苦しみを見つけるのはそれほど難しくはない。」すると、ケリーは、それが他者の罪のために苦しみ、死ぬことであることに気づくのである。」(Pryce-Jones, 96) とあるように、ケリーとコランとの対話に注目する。このように、これまでの先行研究の多くは、主人公の回心の瞬間に焦点を当てて論じてきた。しかしながら、グリーン文学の成熟は、回心という劇的瞬間の描写よりむしろ、日常生活の中で昇華してゆく人間の魂を見事に描ききったところにある。また、マーク・ボスコ (Mark Bosco) が、「グリーンは、カトリック信仰の香気以上のものを書いている。彼は、カトリック教会が秘跡について主張していることを現実化し、明確にして人間の宗教的神秘との出会いを描いている。」(Bosco, 157) と述べているように、この作品にも秘跡観が反映している。カトリック教会のカテキズム (Catechism) によると、「諸秘跡は、キリストによって制定され教会にゆだねられた恵みを実際にもたらすしるしであり、それによって、神的いのちが授けられる。」(*Catechism of the Catholic Church*, 1131 以下、CCCと略す) と定義される。また、*The Oxford Dictionary of the Christian Church*では、「秘跡は、キリスト者がキリストの秘儀に参加する手段である。」(*The Oxford Dictionary of the Christian Church*, 1435) と、キリストの神秘に参入する手段としての面を

強調している。カトリック教会では、以下7つの秘跡を制定している。すなわち、「洗礼」、「堅信」、「聖体」、「赦し」、「病者の塗油」、「叙階」、「婚姻の秘跡」である (CCC, 1210)。

本稿では、7つの秘跡のうち「病者の塗油」(the Anointing of the Sick) という考えを手掛かりに、以下解釈をすすめる。この秘跡は、イエス・キリストによって制定され、使徒ヤコブ (St. James the Just) によって教えられたとされる。使徒ヤコブについては、「エルサレム教会の指導者となったヤコブ、イエスの兄弟のヤコブである可能性が最も高い」(『聖書百科全書』、455) と記されている。「ヤコブの手紙」の中では「病者の塗油」について以下のように言及されている。

あなたがたの中で病気の人はいますか。その人は教会の長老たちを招き、主の名によってオリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。信仰による祈りは病む人を回復させます。また、もしその人が罪を犯していたら、その罪は赦されます。ですから、あなたがたは、互いに罪を告白し、互いのために祈りなさい。そのときあなたがたは癒されるでしょう。正しい祈りは強力で効力があります。
(James, 5: 14-16 下線は筆者による)

ヤコブが特に強調するのは、「正しい祈りは強力で効力がある」という部分である。正しく祈ること、或いは義人の祈りは力強く効果があると説く。信仰を失ったと考える主人公のケリーは、ヨーロッパを出たとき祈ることを放棄した。しかし、アフリカに辿り着いて以降、ケリーは司祭たちと触れ合う生活の中で、他者の幸福のために心から祈ることを通して、徐々に心に光が差し始める。信仰の問題を扱うグリーンの小説を読む場合、人間が限界に立たされた人間は、人間を超えた者に目を向け一心に祈るという点を考慮することは重要である。

ケリーは、有名な教会建築家として、また数々のロマンスの持ち主として華々しい生活を送ってきた。しかしながら、教会建築家として信仰が欠け、愛においてもその能力に限界を感じてアフリカにやってきた。ケリーは苦しみから解放されなかった。絶望に似たあきらめしか感じるができなかった。本稿では、このような人物がどのような心の軌跡をたどって魂の昇華の過程を昇りつめたのかについて考察する。また、死に至るまでのケリーの魂の昇華の過程を、「病者の塗油の秘跡」という考え方を手掛かりに解釈をすすめる。

「病者の塗油の秘跡」の本質的な箇所は以下のように記されている。「病人の額と手に、司教によって祝福された油を、この秘跡の特別な恵みを願う司祭の祈りを伴って塗ること」(『カトリック教会のカテキズム要約』、172)。また、司祭は「秘跡が行われる前にゆるしの秘跡を、後に聖体(エウカリスチア)の秘跡を授けることができる。」(『カトリック教会のカテキズム要約』、462)と説明される。この秘跡による恵みについては、主として以下の4つの観点から説明されている。1. 聖霊の特別なたまものとしての恵み。「重病あるいは老衰からくる困難を克服するために靈魂を励まし、平和と勇気を与える」。2. キリストの受難に一致するという恵み。「病人はキリストの受難にいつそう緊密に

一致する力とたまものを受け取る」。3. 教會的恵み。「病人はこの秘跡の恵みによって教會の聖化とすべての人の善益とに寄与する」。4. 死への準備としての恵み。「洗礼によって始められたキリストの死と復活への参与を完成させるものです。・・・そしてこの最後の塗油は、生涯の終わりに、御父の家に入る前の最後の戦いに備えさせてくれます」(『カトリック教會のカテキズム』、462-63)。恵みについて、『カトリック教會のカテキズム要約』の中では、さらに詳しく次のように説明されている。「イエスは、ご自分の受難と死を通して、苦しみに新たな意味を与えられました。すなわち、苦しみはイエスのそれと結ばれるなら、わたしたち自身と他の人の清めと救いの手段になりうるのです」(『カトリック教會のカテキズム要約』、171) と、苦しみがキリストの受難に一致し、清められたのちに救いの手段となることが強調される。このことから、ケリーの苦しみも、神秘的な経験によって変容することが示唆される。

2. 「司教の船」の船客

ケリーが「白い聖服」(BO, 337) を着た司教である船長の操る船に乗ってやって来る。物語の冒頭では、なぜヨーロッパからアフリカの奥地にやって来たのかについての詮索がなされる。まず、アフリカ人の船員がケリーがどのような人物なのかについて判断する。「この船には神父でも医者でもない白人が一人乗っている」(BO, 339)。続けて、「毎晩ウイスキーを飲み、絶えず煙草を吸っていて彼は金持ちだ。でも彼は誰にも一本の煙草をくれようとはしない」(BO, 339) と、誰とも関わりを持ちたくないらしいとケリーを見る。しかし、やがてこの船客が教會的恵みを必要とする人物であることが明らかになる。

船の旅を共にしてきた船長兼司教がケリーにハンセン病施設に行く理由を尋ねる。司教が「わたしはあなたの行先を知っていますが、あなたがなぜそこに行かれるのかその理由をお話してくださいませんでしたね」(BO, 339)。ケリーの様子を毎日見てきた司教は、司祭職にあるものとして、ケリーがどのような悩みを抱えてアフリカの奥地にあるハンセン病施設まで行かなければならないのか気に掛かったことが窺える。しかし、自分の内面に触れられたくない様子のケリーは司教の質問に対して、「道路は洪水で遮断されていました。このルートしかありません」(BO, 339) とそっけない。行く理由を尋ねたのは、単なる好奇心から出たものではないことは、「私がお尋ねしたのはそのような意味ではありません」(BO, 339) という司教の答えと、そのあとで立ち寄った川岸で証明される。司教は教會やハンセン病施設のための設備などの船荷を受け取ったり、船客を乗せることもある一方で、司教の船を見つけてやって来る老女たちの告白を聞くという大切な司教職も果たしていた。そのため、司教のケリーに対する問いは、もしも告白の必要があるなら聞くという申し出であったと考えられる。

しかし、ケリーが司教に心を開かなかったのは、ケリーの心の扉が固かったためではなく、司教のふるまいに対してケリーが不信を抱いたこともその一因であった。アフリカの神秘的で雄大な自然を

前にして、船客の一人が司教に「キリストが水の上を歩いたと思われるのはあのような自然で説明がされるとは思われませんか」(BO, 340)と尋ねたとき、彼は相手にならなかった。彼はアオサギを射ち落とすのに集中していた。「彼はどんな生き物をも殺戮しようという情熱に憑かれていて、人間だけが自然な死に方をする権利があるとでも考えているようであった」(BO, 340)と書かれている。このアオサギ狩りは、アフリカの厳しい自然環境のなかで伝道とハンセン病患者のための医療活動に携わる神父たちの食料確保という切実で重要な仕事だったが、このときのケリーは、司祭職らしからぬふるまいに対して辛辣な批判の眼を向けている。そのため、司教に対して心のうちを明かそうとはしていない。

また、司教の船は神学校に立ち寄って若い神学生たちを船に乗せた。薪を積み込むために岸で待っていた神学生たちは、薪を外側デッキへ運び込んだあと、マッチ棒を賭け金がわりにしてカルタ遊びに興じた。神学生でありながら年端のゆかぬ子どものようにカード遊びに興じ、笑いさざめくようすを見て、ケリーは、「なぜかわからないが、彼らの笑い声はうるさい子供かジャズのレコードのように彼を苛立たせた。彼は些細なことで彼らが喜ぶことに腹が立った。船から持ってきた一壺のウイスキーにさえ喜ぶことに」(BO, 340)と苛立ちを隠せない。彼らの船での振る舞いは、結局彼らの「隔離された生活からくる無邪気さと未熟さ」(BO, 340)からくるのであるとケリーは考え、失望を覚えた。神学生といえども、世俗社会で暮らす同世代の若者たちと変わったところは何も見受けられない。彼らと神との結婚も世俗に堕した習慣でしかないとケリーは判断する。「この結婚も世俗での結婚のように神と彼らとのあいだで共通する習慣や趣味を共有することでどうにか続いている」(BO, 340)。のちに神学生たちの未熟さは神に対する、子供のような信頼感によるものであり、召命を果たすものにとって純真であることは欠くことのできない資質であることを理解するケリーであるが、この段階ではまだケリーにはこの重要な点が見抜けない。彼らは召命に依って生きている。自己の充足を第一とするケリーと異なる価値観によって神学生たちは生きている。自分たちの生命ですら神のものであり尊い使命を与えられていると信じている者たちにとって、世俗の事柄に必要な以上の関心を持たないことは当然の態度である。しかし、自分のことで頭が一杯になって本質的なことが見抜けない、ケリーは自分と違う世界に生きている者たちに心を開けない。

また、船が神学院のある岸に停泊した夜、ケリーは小径を辿って、ある集落を見たことがあった。集落は貧しく泥で出来た小屋は藁葺きの屋根で、鼠や雨のせいでぼろぼろだった。おそらく満月の夜だったためか、人々は焚火の周りに集まり、空き缶を叩いて踊り笑いさざめいている。粗布で腰を覆った老婆のぎこちない踊りに向けられた無邪気な笑いにケリーは、「笑いの無邪気さに嘲りの感情を抑えきれない」(BO, 34)と描かれている。自分と異なる価値観、文化の中で生活する人々に対して寛容の眼をもって眺めることのできないようすのケリーは、彼らが友好的かそれとも敵対的か、というものさしでしか見ることができない。貧しい暮らしのなかで和気あいあいと宴を共にする人々に対してケリーは、「彼らは強い敵ではない」(BO, 341)という判断を下す。文明の優劣をもって人々を眺

めること、高名な教会建築家としての過度な自負心から心の交流に固く心を閉ざすこと、その結果ケリーがどのような不毛な感情を味わうことになったのかをグリーンは巧みに表現する。「自分だけが、神学校の居間の中において、敵国の言葉のように理解できない笑いの世界に置き去りにされたと感じた」(BO, 341)。そのような視点から改めて船室を見渡すと、部屋は「空虚」"empty"で「頼りなく」"defenceless" (BO, 341) 感じられたと書かれている。このように、苦しみから解放されたい一心でヨーロッパから脱出したケリーだが、神父や現地の人たちの暮らしぶりを目の当たりにすると、ここもまた苦しみを癒してくれる場所ではないと思う。

そのようなケリーの苦しい心情を察したかのように、司教はやさしく声を掛ける。船が目的地の河岸へとまもなく到着しようとしたとき、司教はケリーの船室に備えてある水差しの水を見て、「水が茶色なお気づきでしょう。でもとてもきれいなのです」(BO, 341) と、気遣いを見せる。そのとき司祭の優しさを感じ取ったケリーは、心のうちを話さずにはいられなくなる。「わたしは何事にも苦しみを感じません。わたしは苦しみとはどのようなものかわからなくなりました」(BO, 341) と、船旅のあいだ抱えていた苦悩、すなわちこれまで考えていたような苦しみを感じなくなってしまったという苦悩について語り始めた。司教は何の好奇心も見せず「苦しみは、それが必要とされるときにはいつでも与えられます」(BO, 342) と繰り返した。司教がケリーに対して言った言葉の意味について、テキストでは説明されていない。だが、ケリーが世俗の世界から神秘的な魂の世界へと迎え入れられたことを司教の言葉は意味していると考えられる。『イメージ・シンボル事典』に依ると、「船」"boat"は、キリスト教における「永遠、不死を表すエンブレム」(75) であると記されている。このことから、司教の操る船の船客であるケリーは、たとえ、自分自身では意識していなくても、すでにヨーロッパでの世俗社会での生とは違った別の次元へと向かう船の船客となったことが暗示される。世俗の生活での苦しみに倦み疲れた船客は、教会的恵みを必要としている者として登場することが読み取れる。次では、他者の苦しみに深く関与することで、心の病から解放されてゆくケリーについて考察する。

3. 司祭になった夢

ケリーが何の為にやってきたのかについて、人の体の病気を癒す立場の医師、コラン博士と、魂を癒すことを職務とする司祭である院長が議論する。博士は、自己愛を満足させる為に困窮する他者を利用するのは止めて貰いたい。また、ケリーがハンセン病患者のデオ・グラチアス (Deo Gratias) を世話係として指名したことも不安であると話した。あるハンセン病施設にいた一人の修道女で、「想像力を欠いた老嬢、善を施したり役に立つことを切望する女」(BO, 346) のように、ケリーもまた「ハンセン病偏愛狂者」"a leprophil" であっては困ると感じていたからである。それに対して、司祭でもある院長の見解によると、ケリーはハンセン病施設にとって「無害」(BO, 345) だった。「何か手伝

いたい気持ちと休養を求めてやって来たのでしょう」(BO, 345) と言う。だが、ケリーは司祭でもなく医師でもなかった。教会建築家だった。しかも、教会建築家に相応しい信仰が不足し、人を愛する能力に欠けることに強い罪意識を感じている人物だった。コランはなぜやって来たのかについて、「きみは警察に追われているのかい。わしに話すのを怖れる必要はない。ここにいる誰に対してもだ。このハンセン病施設は外人部隊みたいに安全だ」(BO, 349) と言い、ケリーを安心させようとする。それに対してケリーは、「そうじゃない。犯罪など犯していない。わたしのことに何の関心ももたれないことは保証するよ。わたしは身を引いたんだ、それだけのことさ。もし神父さんたちがわたしをここに置きたくないなら、いつでもわたしは出ていくよ」(BO, 349) と答える。

グリーンは、ケリーの心の病の全治への道の参入のきっかけをデオとマリイ・ライケル (Marie Rycker) との出会いにおいて描く。ケリーは、デオを伴ってジャングルの中を進んだ。ジャングルの中でケリーは「地質学的な時を形成するほどの長い時間を経て、森が樹木を倒して道を遮る」(BO, 350) のを見たり、「深い森林の中で、樹木が何世紀ものあいだに人知れず老木となり、いつしかあちらこちらで朽ち果て」(BO, 350) た森の中の悠久の時間のなかに身を置いたりするうちに、デオを黒人のハンセン病患者というステレオタイプで見る見方を捨て去った。そのことによってデオを一人の人間として見るようになり、次第にデオを尊厳ある一人の人格をもつ人間として見るようになっていた。デオは自己憐憫に溺れず、一人の人格を持つ人間としての尊厳をもって生きていた。ケリーは缶詰のスープやソーセージを用意していたが、デオは古布に包んだ壺に入れた食べ物を持参していた。またデオは夜にはトラックの車体の下にもぐり込んで眠った。その間にもデオはケリーの従僕としての役割をよく果たした。ケリーが一人になりたくて夜道を歩いているとき、後ろからついてくる足音のほうを振り返ると、そこには「指を欠損して丸みを帯びた二本の脚で、杖にすがって立っている男」(BO, 351) がいた。その光景をケリーは心に焼き付けた。デオの抱える苦しみは、おそらくケリーの想像を超えたものである。だが、尊敬の念をもってデオの人格に触れたとき、ケリーの苦しみがいかに些細なものであったかを理解したことが次のエピソードからわかる。また、これをきっかけにケリーの心が他者の苦しみへと向かうことが示される。

その日の夜、ケリーは夢を見た。夢の中に、かつて彼が愛していると思っていた娘が現れた。娘は自分が大切にしていた花瓶を割って泣いていたが、娘は、ケリーが彼女の苦しみに同情しないことに腹を立てていた。それに対しケリーは、「すまない。僕はもう遠くまで来てしまった。僕は全く何も感じるができない。僕はハンセン病患者なんだ」(BO, 351) と釈明する。ケリーが個人的な苦しみからさらに大きな価値ある苦しみへと関心をもちはじめたことが、以下の心象風景としての自然描写で表現される。「渡し船は動いた。昨夜、雨が激しかったにもかかわらず、河川は氾濫しなかった。…翌朝にはまた陽が昇り、小道はリュク市までの数マイルあたりから道路となった」(BO, 351)。司教の操る船に乗ってやってきたケリーは、「渡し船」"ferry"に乗って別の岸へと渡った。道は豪雨のために遮断されたかに思えたのに、実際には、増水による川の氾濫によっても道は破壊されることなく、

大きな市リュクへと続く道となって表れたという描写によって、ケリーの心の進展が表現される。

デオとの出会いによって、自己の内面に閉じこもっていた苦しみが他者の痛みへの共感へと向かったように、マリイとの出会いもケリーの魂の進展を促すことになる。リュクで、ケリーはライケル (Rycker) と店で出会った。彼は、ヤシ油を製造する工場の支配人で、自称敬虔なカトリック教徒だった。ライケルは初対面のケリーにしつこくつきまとい、いかに深刻な心の問題を抱えているかを強調する男だった。悪天候のためライケルの家に宿泊することになったケリーは、中年男のライケルには似合わない「まだ顔の形が整わない顔」(BO, 354) の若い女に会った。ケリーの眼には、世間を知る前にふとしたはずみで結婚してしまった女が、牢獄での暮らしを強いられているように見えた。またケリーは、マリイが来客と会話を楽しむということさえ知らないまま夫の所有物として社会生活からも隔てられていることを理解した。そのような境遇に置かれても、マリイの心は清らかで無垢であることにケリーは驚いた。マリイの習慣は、シスターたちを師と仰いで学んでいた女学校の頃と変わらなかった。日記をつけ、仔犬を可愛がり、主に祈り、天使祝詞を唱えた。

人を愛することもできず、自己愛に耽溺している偽善者の夫が来客に向かって愛について話し始めると、マリイはいつでもそっと外へぬけだした。そのようなときには、マリイは力をこめて木片を河に投げ込む。習慣的に木片を投げ込むことにしているために腕前が上がっているのか、木片が投げ込まれるときの音が "plop-plop-plop" と軽快に表現される。夫に嫌悪を感じる、このような生活には耐えられないと思う。思いのたけを籠めて木片を水面に打ち付けながら大河へ流してしまう。そして心の無垢は保たれる。そのようにして、マリイは夫から身を守ってきたのだとケリーは見た。ケリーはライケルの飽きることのない妻への愚痴に耳を傾けるふりをしながらも、マリイの姿をじっと見守った。このとき、ケリーの意識に大きな変化が起きたことが一つの文章で表現される。「沈黙のうちに、河の水が溢れて流れ下る音が聞こえた」(BO, 357)。ケリーの意識が変化したのは、無垢なマリイのこの行為を見たからである。それと同時に、ケリーはマリイの苦しみに深く関わってゆく。

ハンセン病施設でケリーの帰りを待ち構えていたコランは、「きみは役に立ちたいんだろう。……くだらん仕事をしたがために下働きしたいわけではないだろう。きみはマゾヒストでもなければ聖人でもないんだ」(BO, 359) と、息せききって尋ねた。ケリーの心に変化が起きたことを確信したかのようにコランはケリーを連れて病院を廻った。両手で支えなくては歩けないほど膨れ上がった睾丸を持つ男、目蓋が麻痺して目を閉じることもできない女、女のように片方の乳が大きくだらりと垂れ下がった男、象皮病の男、小児麻痺で足をひきずっている女。しかし、そのような人たちを見てもケリーは何も感じることはできなかった。彼らに対して医師はもはや何もしてやることはできなかった。心臓が弱りすぎていて手術もできないし、結核で死にかけている者に医師がしてやれることは何もなかった。ここで必要とされるのは、医師と神父たち以外のもう一人の天職をもつ人間だった。助かる見込みのない子供が家族と共に最後のときを過ごせたり、ハンセン病に感染した親が子供を隔離して悲しい思いをしなくてもすむ特別な治療院が必要だった。また、わざわざ住み慣れた集落を離れて見

知らぬ人ばかりのハンセン病施設にやってもなくても治療が受けられる施設があれば淋しさが避けられる。「移動式組み立て病院をつくるのがわしの夢だ。・・・わたしは製図ができない。・・・だからわたしにはきみが必要なのがわかるだろう」(BO, 363) と、コランは思いのたけをこめてケリーに語る。コランの言葉に対して、ケリーは簡単には返事することができない。ヨーロッパで暮らしていたころ、ケリーは強い信仰心をもって教会建築に携わっていたと信じていた。しかし、様々な人生経験を経た今となっては、青春という熱に浮かされたような信仰を持てるはずはない。もしも、患者のために建築家としての才能を用いるとしたら、少なくとも自己満足の為に働きたくはなかった。自分には信仰心が欠如しているという現実を前提に、ケリーは第一歩を踏み出したかった。それはケリーの良心の問題だった。ケリーは、コランに向けて次のような一文をしたためた。「天職とは愛の行為である。それは専門的職業ではない」(BO, 364)。デオに持たせたコラン宛ての手紙をコランは投げ棄てた。コランはすぐさまケリーの部屋に押し掛けた。そして、「誰が気にかけるかね」(BO, 364) と、強く言い放った。コランの「誰が気にかけるかね」(BO, 364) という言葉がケリーの頭の中で反響し続けた。コランのように無神論者であれば、喉の乾きを訴える人の為に技術をもつ者が井戸を掘ればよい。患者たちの病室の為にケリーが製図すると伝えれば、おそらく神父たちも歓迎してくれるだろう。

その夜、ケリーは夢を見た。現実生活の中では図面を引くだけのことであっても、その第一歩を踏み出せなかった。だが、夢という無意識の領域からの働きかけに依ってケリーは次の段階に進むための魂の変容を遂げた。それは司祭になった夢だった。彼はミサを挙げる命令を受けていた。その日の夜のうちに葡萄酒を手に入れてミサを行わなければならない。「明日では遅すぎる。それでは彼は永久にチャンスを失ってしまう」(BO, 364) と焦りを覚えた。ようやく葡萄酒を分けて貰うはずの司祭に会ったとき、「素晴らしくほっとした気持ちになり、告白を聞いてもらえると安心しかけた」(BO, 365) のに、彼が司祭に事情を話し「自分の恐怖と責任感の重荷を下ろそうとしたまさにそのとき」(BO, 365) 第二の司祭が入って来た。しかもその司祭は残り少ない葡萄酒を持って行ってしまった。ケリーの心境について、「そのときケリーは、打ちひしがれた。それはちょうど道路の曲がり角で希望が約束されていたのに来てみたら遅すぎた」(BO, 365) という具合であったと書かれている。病室を製図することに決めたときの心の変化を、グリーンは次のように描写する。「彼は苦痛にあえぐ獣のように叫び声をあげて目を覚ました。あらゆるトタン屋根に激しい雨が打ち付けて稲妻が光ったとき、彼は蚊帳の作る空間がちょうど棺桶ほどの小さな白い小部屋に見えた」(BO, 365)。この夢によって、ケリーは心の迷いを振り払い新しい人生を生きる決意を固める。夢のなかで司祭としてミサを挙げる責任を果たすことが、約束された希望へと至る道であると悟ったケリーは、さらに多くの苦しみに関与してゆく。

4. 人生に豊穡をもたらすペンデレ

困難を克服するため霊的に励まされたケリーは、ここでは教会の聖化とすべての人の善益とにどのように関与するかが描かれる。神父たちがケリーの部屋の壁に掛けておいた十字架をデオが壊した時にデオは姿を消した。十字架に関心もないケリーには、デオがそのために出て行ったとは思っても寄らないことであった。懐中電灯を頼りにケリーはデオを探しに夜の森の中に入って行った。そのとき、「デオ・グラチアスにハンセン病施設の安全と親密さから出てここに来させたものは何であったのか」(BO, 368) とケリーは思う。デオは沼に落ちていた。手足が不自由で這い上がるができなかったらしい。ケリーはデオを助けようと沼に入ったが、引き上げることは不可能と見て、いったん上がることにした。ケリーが這い上がろうとするのを見て、デオはケリーを離さなかった。ケリーはデオが恐怖のあまり動けないことを理解すると、デオのそばに坐り、安心させるつもりで手を握ってやった。そのときデオは、「ペンデレ」"Pendélé" (BO, 369) と呟いた。夜の森の中で、死ぬほど恐怖を感じている自分の身を案じて、指の欠損している手をずっと握りしめられているときにデオの口から漏れ出た言葉がこの「ペンデレ」という言葉だった。「ペンデレ」とはデオにとって「どこか森の中の水に近い場所で、彼にとって非常に大切なことがある場所」(BO, 369) であり、デオがまだ健康な子供の頃、母親に連れられていったある水辺のことだった。「デオが歌ったり踊ったりゲームをしたり遊んだりしたことを思い出すことのできた」(BO, 369) 場所だった。ケリーは、デオがハンセン病施設ではなく、別の場所を必要としていることを理解する。デオは施設では幸福ではない。デオが必要とするのは「ペンデレ」であることをケリーは理解する。しかし、教会建築家である自分にできることは限られている。何かしなくてはならないという気持ちを吐き出すようにケリーは、デオと一晩過ごしたときの心情についてコランに話す。「わたしはデオがわたしを必要としているのだという奇妙な気持ちになった。…必要とされると特別な気持ちがある。神経が昂るのではなく心が安らぐんだ」(BO, 369)。人の助けになること、役に立つことに従事したいというケリーの気持ちをコランは受け入れる。しかし、何事にも冷静な判断力を発揮するコランは、初老の男が熱に浮かされた若者のように希望を語る様子を見て冷笑的に答える。「我々はいつでも希望と青春とを結びつける。…しかし希望は老人病の一つということもある」(BO, 370)。コランの反応からは、たとえ高邁な理想を抱いていたとしても、現実の中で実現することは不可能に近いほど困難なことくらい君にはよくわかっているだろう、と念を押しているようにも聞こえる。しかし、魂の次元において昇華の階段を昇りつつあるケリーは、無神論者のコランとは違う反応を示すことをグリーンは書きとめている。「わたしがもし行方不明になったら、君にはどこを探せばいいかわかるだろう」(BO, 370)。グリーンは、ケリーのこの言葉の意味についての説明を一切書き込んでいない。しかし、コランは無神論者であり、ケリーが信仰への道を歩み出したことを考慮すると、「行方不明になったときに探せば見つかる」とは、ケリーにとって、この地上を離れた別の場所、すなわち天国かあるいは煉獄か地獄ということになる。つま

り、「希望」という考え方についてコランは医師の立場から、現実の世界では何を成し遂げることもできなくなった老人の戯言でしかないと考えてのに対して、ケリーは死を超越したところで開花する希望を見ているように思われる。

ケリーが言ったことの意味について考えるにあたって、キリスト教徒にとって「希望」というものが何を意味するのか、見ておきたい。『岩波キリスト教辞典』の「希望」の項では、「神と人々への愛のゆえに自分の命をささげ、十字架の上で無残に死んだイエスが神によって復活させられ、栄光に挙げられたことは、神がイエスを通して世界と人類の苦悩と傷を担い、回復させることの希望の保証となった」と「希望」の根拠が呈示される。また、「キリスト者はただ無為に死後の救いを待ち望んで現世を耐えるのではなく、キリストの出来事において約束された神の勝利への希望の上に、世界の正義と平和への責任と具体的な行動を促されるのである」(『岩波キリスト教辞典』、365-66)と記されている。これらの説明を踏まえたうえで、ケリーの心に芽生えた「希望」について考えてみると、コランが現実的な範囲で「希望」についての意見を述べたのに対して、人間の側からではなく神の救いの計画というキリスト教の文脈において「希望」を語っているのではないかと考えられる。しかし、そこには悲壮感もなく英雄気取りもないことがコランを驚かせる。そのことがグリーン特有の巧みな描写で表現される。「ケリーの顔が笑いに歪んで、口を開けていた。医師はケリーが駄洒落を飛ばしたことに驚いた」(BO, 370)。「笑いに歪んで口を開ける」(Query's face was twisted into rictus of laugh)というときに用いられる "rictus" は、「恐怖や死などで笑ったように見えるときの口腔」という意味であることから、ケリーは、「希望」に到達するための自己犠牲の死を覚悟しているとも読める。

神の摂理という側面から、ケリーの苦しみはさらなる段階へと進む。『カトリック教会のカテキズム要約』の中では、「病者の塗油の秘跡」に関し、病人に対するイエスの同情と様々な病気に悩む人と癒しについての記述がなされている。つまり、苦しみに新たな意味を与えることによって罪と苦しみと死とは勝利すると記されている。「イエスは、ご自分の受難と死を通して苦しみに新たな意味を与えられました。すなわち、苦しみはイエスのそれと結ばれるなら、私たち自身とほかの人の清めと救いの手段となり得るのです」(『カトリック教会のカテキズム要約』、171)。ケリーの魂の昇華の次の段階として、ケリーの苦しみはマリイの苦しみとともにキリストの苦しみのうちに結ばれ、清めと救いの手段としての苦しみへと変容しなければならない。ここでグリーンは、油を携えてやってくるマリイと司教とが登場する場面で、「病者の塗油の秘跡」を暗示しながら、清められた苦しみが救いの手段へと進むケリーの心の変化を描いているように思われる。

どのようにして「病者の塗油の秘跡」が執り行われるかについては、「司教または司祭」が「できるだけ司教によって祝福された油を司教の祈りを伴って塗る」ことによって授けるとされる。この秘跡の効果は「病人は、父なる神の家へ入るための準備をさせる」とされる。しかし、この秘跡の挙行的ためには「病人が予め個人的にゆるしの秘跡を受けているようにしなければなりません。・・・その同じ信者が、容態が悪化した場合、また他の重大な病気にかかった場合、この秘跡を繰り返し受け

ることができます」(『カトリック教会のカテキズム要約』、171-72)と、司教が聖別した油をもって挙行することによって神の家に入る準備をすることと、その前に「赦しの秘跡」が必要であることが記されている。「赦しの秘跡」の本質的要素については、次の二点が挙げられている。一つは、「聖霊の働きのもとに回心する人間が実践する行為」、もう一つは「キリストの名によって罪のゆるしを与え、償いの仕方を定める司祭のゆるし」(『カトリック教会のカテキズム要約』、166)である。

院長のもとにマリイがやってきた。夫に頼まれて「油」"oil"を届けに来た。愛の能力に限界を感じ、多くの女性を傷つけてきたケリーはマリイに会うことを極力避けていた。しかし、テキストでは、聖母マリアを連想させるような名前で、少女のように無垢な心をもつ若い女が油を司教のところへ携えケリーの前に姿を現すという設定になっている。ケリーの禁欲的生活態度を反映するかのよう、院長がケリーの部屋に見たものは、神父たちの部屋に漂う簡素さ、質素な感じとは異なる印象であった。「真昼の酷暑の中にさえあって、冷たく酷薄な部屋の印象に院長は心を刺し貫かれるように思った。まるで十字架のない墓のようだった」(BO, 379)。「心を刺し貫く」(stick)という動詞が、院長に与えた心の衝撃を物語る。ODEでは、"stick"という動詞は、"push a sharp or pointed object into or through" (ODE) と定義される。このことから、たとえケリーは修道士のように禁欲的な生活を送っていたとしても、そのような生活は復活を前提としたキリストの受難の希望からは隔たっていることが暗示される。

ケリーを訪問して話し相手になって欲しいと伝えることをライケルから命じられたマリイは、ケリーに会わないわけにはいかないと思い詰めていた。院長も、そのような境遇のマリイを思いやり、「せめて会って油の札を言い、訪問の件は自分の口から断るだけでもできないか」(BO, 380)と、ケリーに聞く。だがケリーの心は強い抵抗を感じる。院長の口調はあくまで寛容である。しかし、神のつくった秩序のもとで生きている司祭でもある院長は、ケリーの心を見透すように、「あなたはマリイが怖いわけでないでしょう」(BO, 380)と畳み掛けるように問う。「おそらく怖くはありません。ある意味では」(BO, 380)というケリーの答えには戸惑いが感じられる。十字架のない墓のような部屋、つまり人間らしい心の暖かみを全て寄せ付けないケリーの魂を救う必要を感じたかのように、院長は怖がらなくていい、全てを神の御旨に委ねるようにと励ますようである。また、それが耐えられないほどの苦痛であっても、その苦しみは生まれ変わるために必要なのだという意味の助言を与える。「感覚が蘇ったことを喜ぶ患者なら知っています。たとえ痛みであっても。でもあなたは苦しみにチャンスを与えねばなりませんよ」(BO, 380)と言う。苦痛はチャンスに変えなければならないと院長は言った。そのチャンスは到来した。ケリーに苦痛を感じさせるマリイがドアの外に立っていた。ケリーは、照りつける日差しのなかでマリイが「苦痛でぶざまに歪んだ顔」(BO, 380)をしているのを見た。「マリイはまことに善良な人です」(BO, 381)、という院長にケリーは賛意を示したうえで、「その通りです、神父さん。なのにあの人はあんなところであのような男と二人きりで砂漠の中で生きなくてはならないのです」(BO, 381)と付け加えた。アフリカ奥地のヤシ油工場の一画で、酷薄な夫にその行動

の全てを監視されながら砂漠の中の牢獄のような暮らしから、どのようにマリイは解放されるのだろうか。司祭である院長の考えでは、「人は大人にならなくてはなりません。そのようなことよりも私たちはもっと込み入ったことの為に召されているのです」(BO, 381)と言う。司教の言う「そのようなこと」とは、マリイのように幸福とはいえない環境に置かれていることであり、そのことを悩み続けるのは成熟とはいえないという意味であろう。いつまでも不遇な境遇に置かれていることを嘆き続けることよりも行動に出るようという助言とも受け取れる。この司教の言葉に敏感に反応したかのように、ケリーは、自分が怖ろしい何かに一歩踏み出そうとしていることを感じた。しかし、ケリーは司教に向かって『わたしをあの娘とあの血の涙に近づけないでください。』と言って怒り狂い机を殴った。というのも聖痕にだけしかそぐわない言葉を使ってしまったと思ったからである」(BO, 381)と記されている。このとき、ケリー自身は信仰において「燃えつきた」と思っていたにも関わらず、ケリーの苦しみがキリストの受難においてマリイの苦しみと結びつき、次なる行動へと導ききっかけとなっている。

また、この場面では、ケリーの苦しみがマリイの苦しみとともにキリストの苦しみと結ばれて清められ、魂の昇華へと辿りつくための一つの段階となり得たかが印象深く書き留められる。ケリーは一通の手紙を受け取っていた。それはヨーロッパでケリーが捨てた女からの手紙だった。女は元の恋人の居所を探して手紙を送りつけてきた。そこには「全てをあなたに」(BO, 381)という文字が綴られていた。愛も信仰もすべてが燃え尽きたと告白するケリーには「全てをあなたに」という文字が、かつてヨーロッパで暮らしていたころのロマンスの響きをもって訴えかけてくることはなかった。それよりむしろ捨てられた女の苦しみが「全てをあなたに」という愛の言葉を通して感じとれることにケリーは、新鮮な驚きを感じた。「人は自分の痛みを感じることをやめたときに他人の苦痛の影響を感じる事が出来る」(BO, 381)という実感をもった。ケリーのそのような気持ちを察したかのように、司教は優しくケリーを見つめた。そして、司祭でもある院長は、「葉巻を灰皿でもみ消し、また新しい一本に火をつけながらドアの方へ行った」(BO, 381)と表現される。グリーンは日常生活における人物の身の回りの日用品を用いて、巧みに人間の魂の次元における経験とを重ね合わせる。司教が葉巻を消し新しい葉巻に火をつけ、入口へと向かったという行為から、祭壇の前の蠟燭を消し、新たな蠟燭に火を灯したことが暗示される。そのことによりケリーの魂が次のステップへと昇華したことが示される。ケリーの清められた苦しみに、新たにどのような意味が与えられたのかについてはテキストには記されていない。しかし、司教による祭儀を通して、「病者の塗油の秘跡」の恵みを授けられたケリーは、キリストの受難に一層緊密に一致する力を得て、魂の昇華の次の段階へと進む。

5. 上流へさかのぼる魚

この章では、死への準備としてキリストの死と復活へと参与するケリーの最後の場面が描かれる。

新しい病棟の棟上げを祝って、礼拝の後で祝宴があった。神父や工事関係者が集まって、礼拝のあとで宴会があった。賑やかな宴会から抜けてケリーが戸外に出たとき、雷鳴の鳴り響く空の下にデオが立っていることにケリーは気づいた。「なぜ祝宴にでないのかい、デオ・グラチアス」(BO, 447)と訊ねてすぐにケリーは、「祝宴が、体の不自由ではない、石工や大工や煉瓦職人のためであったことを思い出した」(BO, 447)。デオのような患者たちのためにこそ建てられたはずの病院なのに、デオは部外者だった。共に祝うことすら考慮されていなかった。「わたしはあなたと一緒にいきます」(BO, 448)と、デオはケリーに向かって繰り返した。そのとき、デオの苦しみがどのようにケリーの心に深く刻まれたかをグリーンは印象深く次のように表現する。「どこかで電話が鳴りだした。人間のありふれた音が雨を通して聞こえる赤ん坊の泣き声のようにしつこく鳴り響いていた」(BO, 448)。このとき、すべての人たちのための聖堂を建てることを召命だと考えるようになったのに、現実は違っていたことにケリーは気づく。「病者の塗油の秘跡」によって「キリストの死と復活への参与を完成させるもの」とされたケリーに、グリーンは、白人の植民地政策の犠牲となったこの地において、ヨーロッパの教会建築家の非業の死をもってアフリカの大地に埋められること、という結論を出す。歴史的にみれば、ヨーロッパ人たちによるアフリカの植民地政策は、キリスト教神父たちの布教活動と共に推進されてきた。植民地に入った神父たちは、当時誰も顧みなかった患者たちの世話をする必要に駆られ、宗主国の支援を受けながら活動を続けた。しかしながら、ジェラルド・マクナイト (Gerald McKnight) が『シュヴァイツァーを告発する』の中に書いているように、神父たちのハンセン病患者のための医療活動にも否定的な側面があった。「シュヴァイツァーにとっては、患者の回復も、彼が現にそこにおいて彼らの面倒をみてやっているということと同じくらいに大事なかどうかは疑問だ。これはたんに、イエス・キリストのように生きてみたいという私的な実験の結果にすぎず治療目的が本来の目的ではないのかもしれない」(『シュヴァイツァーを告発する』、20)と書かれている。

また、グリーンは、ケリーに無実の姦通の罪のために嫉妬に狂ったライケルの銃の前に倒れることをもって、キリストの死と復活への参与を完成させている。束縛の強い夫から逃れてヨーロッパで自由に暮らしたいというマリイの夢を実現させるためにケリーは、無実の姦通者として射殺される。その行為がたとえ、無意識の行為であったとしても、マリイと子供は祭壇の前で自由に祈る生活を送ることができるだろう。

しかし、「キリスト者の生涯の終わりの時の赦しと、病者の塗油と、聖体(エウカリスチア)は、最後の旅路を支えるものとして1つにまとめられ、祖国に入る準備の秘跡あるいは地上の旅路を完了する秘跡などと呼ばれています。」(『カトリック教会のカテキズム』、464)と説明されているように、ケリーが地上の旅路を終えるためには、告白による罪の赦しと、聖体の秘跡を授かることが望ましいことが記されている。

ケリーをシュヴァイツァーに譬えて吹聴するライケルに激怒して、ケリーはライケルのもとに車を飛ばした。ライケルの家に着くと、ケリーは困ったようすのマリイと会う。夫は子供は欲しくないの

に、妊娠したようだった。ライケルを殴るつもりで駆けつけてきたのに、ケリーはマリイに引きとめられた。ライケルは熱を出して休んでいる。そのようなときに断りなく来客を通すと夫は機嫌が悪くなる。このようなタイミングで妊娠したことを話せば妻としての不注意をどれほど責められるかもしれないと、マリイは言う。「マリイは絶望した表情でケリーをみた。目に溜まった涙が汗のようにぶざまに流れた。マリイは言った。『あたし、子供ができたらしいんです』」(BO, 424)。ケリーは、心から血の涙を流している女の名前を尋ねた。「『マリイ』それはあらゆる女のなかで一番ありふれた名前だった。しかし、彼にはそれが警告のように聞こえた」(BO, 424)と書かれている。「マリイ」という名は過去にケリーとの恋愛に破れて自ら命を絶った女性の名前であると同時に、イエスの母マリアの名前と重なる。永遠の処女として称えられた聖母マリアは、わが子イエスのエルサレム行きに同行し、その惨死を看取ったとされる。そのような想像力に行動をうながされたかのようにケリーはマリイを病院のあるリュク市に連れてゆく。到着したのはその夜で、マリイの泣き声を聞いたように思ったケリーはウイスキーをもってマリイの部屋を訪ねた。そこでケリーは、自分の過去において、いかに自分が人を愛する能力に欠け、信仰もないまま、我慢のならぬ人間に成り果てたかを、王様と宝石職人にたとえてマリイに話す。王様とは神のことで、宝石職人とは教会建築家である自分のことだった。この職人は賢い男だったので王様が存在することを証明することができるのに、親たちの迷信は信じることはできなかった。親たちは言った。一人一人の心の中に王様はいるのだと。しかし、一人きりしかいない王様がそれぞれの心に存在するなどという理屈に合わないことを受け入れることはできなかったのだ、とケリーは説明する。マリイは司祭ではない。だが、「マリア」の前で過去の罪を告白することによってケリーが、「赦しの秘跡」を受けたことが暗示される。『カトリック教会のカテキズムの要約』には次のように「赦しの秘跡」による恵みが書かれている。「神との和解、教会との和解、恩恵の状態の回復、大罪によって科された永遠の罰の放免、良心の平和と平穏さ、霊的慰め、キリスト者として闘うための霊的力の増大」(『カトリック教会のカテキズムの要約』、169)。その恵みによるケリーの心境の変化が描写される。「沈黙の中で、詰まっていた水が一気に流れ込んだ。ケリーは、自分のベッドに腰掛けた。涼しい時間帯だった。彼は思った。王様は死んだ。新しい王様万歳。ケリーはここに一つの国、一つの生活を発見したようである」(BO, 436)。このとき、告白による「赦しの秘跡」が授けられたことが示唆される。

翌朝、ケリーは司教に会いに行った。この場面で、ケリーが「聖体の秘跡」を受けたことが比喩的に描かれている。この秘跡にはパンと葡萄酒は欠かせないとされている。物語ではパンについても葡萄酒についても直接の言及はない。しかし、葡萄酒とパンとはビールで代用されて、ケリーがこの秘跡を受けたことが暗示される。司教はケリーに「ビールを一本抜かせていただきますよ」(BO, 436)と申し出る。この司教は、物語の冒頭でケリーを乗せてきた船長兼司教とは別の人物だった。司教は、これまで出会った神父たちのように、ケリーの個人的なことに好奇心を見せなかった。それぞれの神父には、それぞれの人生や国や生まれ育った家庭があった。しかし、神の召命によって生き

ている今では、彼らは司教という普遍的な匿名性の中で生きている。司教から「聖体の秘跡」を受けたあとケリーは、「今まさに新しい国に受け入れられようとしている」(BO, 436)と感じたと書かれている。このことから、司教からただビールをご馳走になったのではなく、ケリーは、魂の次元において何らかの進展を経験したことが理解できる。

「聖体の秘跡」については、以下の二つの面についても説明される。一つは、この秘跡による実りといけにえについてである。『カトリック教会のカテキズムの要約』によると、実りについては、「キリストおよびその教会とわたしたちとの一致を強め」て、「わたしたちを隣人愛のさらなる実践へと促す」とされている(『カトリック教会のカテキズムの要約』、163)。また、いけにえという観点からは、「エスカリチアでは、キリストのいけにえはまたその体に属する人々がささげるいけにえとなります。信者たちの生活、賛美、苦しみ、祈り、労働などはキリストのそれとキリストのまったき奉獻とに合わせられ、新たな価値を得るのです」(『カトリック教会のカテキズム』、416)。つまり、ケリーは司教から聖体拝領を受け、キリストのいけにえと一致したことによってキリストの死と復活へと方向づけられたことが示される。

ケリーが射殺される直前、ケリーはコランの部屋にいた。そこでケリーはコランの眺めているハンセン病図説を覗き込んだ。神経系に沿って群がる菌が色彩豊かに描かれてあった。専門家のあいだでは「上流へさかのぼる魚」(BO, 454)と呼ばれているとコランは説明する。コランによると、人間は神経の痛みに対応して蠢く菌の如く、他者の心の痛みを感じることができるよう造られていると言う。ケリーの死もまた、他者の苦しみに反応して吸い寄せられた結果であったと考えられる。

6. おわりに

『燃え尽きた人間』では、ケリーのハンセン病施設での日常生活における経験と魂の昇華の過程とが同時進行的に描かれる。ヨーロッパでの人間関係に悩んだ過去から、アフリカに来て誰も関わらないようにケリーは努めていた。しかし、ケリーの意志に反して、デオやマリイの苦しみを見逃せず、他者の苦しみに深く関わってゆくことになる。冷酷な夫からマリイと赤ん坊を守り、ヨーロッパで自由に暮らせるように無実の姦通者として射殺される直前、ケリーはコランを訪ねていた。そこでケリーは苦しみにについていつかコランが言ったことを思い出す。「いつかきみは、人は苦しむときに人間としての条件の一部になったことを感じ始める、キリストの神話の側に立つと言ったことがあるね」(BO, 454)。それに対してコランは、「患者が治ると、我々は無駄に遊ばせておく余裕はないのだ」(BO, 454)と言い放って、他者の救いの手段となるようにケリーに行動を促す。その結果としてグリーンは、ケリーに無実の姦通者として殺害されることを選ばせている。『岩波キリスト教辞典』は、「病者の塗油の秘跡」について次のように記している。「イエスから派遣された使徒たちは油を塗って病人をいやしていた」(『岩波キリスト教辞典』、938)。マリイが油を携えてやってきたとき、罪の浄化

への切なる願いを抱いていたケリーは、司教によって「病者の塗油の秘跡」を授かったことが暗示される。また、マリイと過ごした夜には、過去の罪を告白して「赦しの秘跡」を受け、その翌朝には司教の船を訪ねて葡萄酒ではないにしても、ビールをご馳走になったことから、永遠のいのちに移る旅路の糧としての「聖体の秘跡」を授かったと考えることができる。このように、信仰の問題を扱うグリーンの『燃え尽きた人間』の主人公の魂の軌跡は、「病者の塗油の秘跡」という観点からたどることができるのである。

Works Cited

- 大貫隆 他編 『岩波キリスト教辞典』 岩波書店、2002.
- 小田島嘉久 『キリスト教倫理入門』 ヨルダン社、2001.
- 河合伸 訳、ジェラルド・マクナイト著 『シュヴァイツァーを告発する』 すずさわ叢書8、1976.
- "厚生労働省 報道発表資料" <<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/01/h0131-5.>>
- "国立ハンセン病資料館" <<http://www.hansen-dis.jp/>>
- 新要理書編纂特別委員会編 『カトリック教会の教え』 カトリック中央協議会、2011.
- 日本カトリック司教協議会 教理委員会訳・監修 『カトリック教会のカテキズム』 カトリック中央協議会、2008.
- 日本カトリック司教協議会 常任司教委員会訳・監修 『カトリック教会のカテキズム要約』 カトリック中央協議会、2010.
- 野谷啓二 『イギリスのカトリック文芸復興』 南窓社、2006.
- ボウカー・ジョン 編著 荒井献 他監訳 『聖書百科全書』 三省堂、2000.
- 本田善一郎 訳 『カトリックの教え』 ドン・ボスコ社、2009.
- Attwater, Donald. ed. *A Catholic Dictionary*. Illinois: Tan Books and Publishers, 1997.
- Bosco, Mark. *Graham Greene's Catholic Imagination*. New York: Oxford UP, 2005.
- Catholic Church. *Catechism of the Catholic Church: With Modifications from the Editio Typica*. New York: Doubleday, 1995.
- Cross, F. L., ed. *The Oxford Dictionary of the Christian Church*. Oxford: Oxford UP, 1997.
- Dooley, D. J., "A Burnt-Out Case reconsidered." *Wiseman Review*, ccxxxvII (Summer 1963): 168-78.
- Greene, Graham. *A Burn-out Case*. London: Heinemann, 1961.
- . *Collected Essays: Including The Lost Childhood*. New York: Viking, 1969.
- The Holy Bible: New Revised Standard Version*. Oxford: Oxford UP, 1995.
- Kelly, Richard. *Graham Greene: A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne Publishers, 1992.

Kermorde, Frank. "Mr Greene's Egg and Crosses." *Puzzles and Epiphanies : Essays and Reviews 1958-1961*. London : Routledge and Kegan Paul, 1963.

Lodge, David. *Graham Greene*. New York : Columbia UP, 1966.

Pryce-Jones, David. *Graham Greene*. Glasgow : Oliver and Boyd, 1973.

Reichardt, Mary R, ed. *Encyclopedia of Catholic Literature Volume II*. London : Greenwood Press, 2004.

Sewell, Elizabeth, "Graham Greene : A Discussion of his Work." *Dublin Review*, ccxxviii (Spring 1954) : 12-21.

Vries, Ad de. *Dictionary of Symbols and Imagery*. London : North-Holland Publishing Company, 1974.